

## 最新鋭の設備を導入、主力のプレカット加工における事業領域の拡大を狙う

### 防秋産業株式会社



秋山 泰三 社長  
(あきやま・たいぞう)

#### ●会社概要

所在地：防府市大字上右田1159番地  
 事業内容：木材・建材販売、プレカット  
 年商：3億5千万円（2016年5月期）  
 設立：1963年7月  
 資本金：1,000万円  
 従業員：24名（2016年7月末現在）  
 URL：<http://www.bs-precut.co.jp/>

#### ●会社沿革

- 1950年 美祢市(旧秋芳町)で創業
- 1962年 防府市に進出
- 1963年 防秋産業株式会社を設立
- 1991年 ハウス部材工場完成
- 1992年 建築部材工場完成
- 1994年 プレカット事業部を設立
- 1997年 木材乾燥機を導入
- 2009年 プレカット事業で(株)みうらと業務提携
- 2016年 ドイツ・フンデガー社製の加工機を導入

#### ◎はじめに

本稿で紹介する防秋産業(株)は、戸建て木造住宅等の建築現場向けに、あらかじめ工場では木材を機械加工するプレカット事業を主力とする。県内の同業他社との連携等によって、「木のスペシャリスト」として県央地域を中心に確固たる営業基盤を確立しているが、住宅市場の先細りを取り巻く事業環境は厳しい。そこで、中四国地方初の最新鋭加工設備を導入。非住宅分野に本格進出し、新たな収益の柱に育てる方針だ。

#### ◎主力事業はプレカット加工

同社は、1950年、現社長の秋山泰三氏の祖父である幸夫氏が秋芳町（現在の美祢市）で創業した。製函を主力事業とし、製材業としてトロ箱（海産物を入れる木箱）等の製造も手掛けていた。1962年には防府市に進出。時代の変化に合わせ、大手ゼネコン向け木製型枠やハウス部材（下地材等）、建築部材（構造材等）へと事業領域を拡大してきた。

現在では、木材・建材の販売、プレカットを行う。中でも注力しているのが売上のほぼ半分を占めるプレカット事業だ。プレカットとは言葉通り、事前に切断すること。従来の戸建て住宅における木造建築では、大工が手仕事で木材加工を行っていたが、今では大半がプレカット化されている。柱等の構造材だけでなく、継手や仕口（木材の連結部分）等もプレカット加工すれば、手間のかかる現場での手作業は最小限で済む。プレカット化によって、建築コストの低減、工期の短縮、加工精度の向上（大工の技量によらない均質な加工）につながる。また、施工現場が省スペース化されるほか、騒音・粉塵が発生しないというメリットもある。

## ◎(株)みうらとプレカット事業を統合

同社は2009年、周南市の(株)みうらと業務提携した。(株)みうらは、住宅資材等の製造・販売を手掛ける同業者で、プレカット事業の効率化を目的に、プレカットラインを防秋産業(株)に移設集約した。

新しい設備は両社の頭文字をとって「BMランバー」と名付け、プレカットの生産能力は2ラインで月産1,500坪（30坪の戸建て住宅で50棟換算、内訳は(株)みうら900坪、防秋産業(株)600坪）に拡大。一方、プレカットに関わる両社の人員を14名から11名に減らすことで、固定費を削減して損益分岐点を引き下げ、利益を出しやすい体質とした。

防秋産業(株)は、地元の大工・工務店との取引が多く、在来工法（木造軸組構法）及び金物工法（下写真：金具を連結部等に使用して木材の強度や耐久性等を向上）で施工される戸建て木造住宅向けプレカット加工を主力事業とする。近年は「より個性的でこだわりのある家づくり」のサポート体制を強化しており、顧客の要望にきめ細やかに対応する点が強みだ。それに対し、(株)みうらは、金物工法を含めた構造材やパネルの製造、内装用の造作材や家具まで住宅1棟全体をカバーする事業を展開している。



▲プレカットされた木材（金物工法）

両社の主要取引先はバッティングせず、防秋産業(株)が得意のプレカット事業に専念する一方、(株)みうらは高い営業力を活かして販路拡大に注力するという、お互いの強みを活かした役割分担が相乗効果を生み出している。プレカット事業は輸送コスト、納期の問題で地域密着型の事業展開に優位性があり、(株)みうらとの連携による新たなビジネスモデルの構築によって、同社は本社のある防府市のほか県央地域を中心に確固たる営業基盤を確立している。

## ◎中国・四国地方初の最新鋭加工機を導入

これまで同社は、継続的に設備投資を実施してきた。1994年にドイツ製のモルダー加工機（仕上げ工程に使用）、1997年に木材乾燥機、2000年に全自動プレカット加工機を導入した。

2011年には、BMランバーの2ラインのうち、老朽化した1ラインを更新。この設備更新によって、加工精度が高まり、柱材と横架材（梁・桁など水平方向に架ける構造材）を同ラインで加工できるようになったことで生産性が向上した。さらに、加工の難しい金物工法等の特殊加工に対応可能となり、九州や広島方面への販路拡大につながっている。

こうした積極的な設備投資は、同業他社との差別化を明確にし、事業拡大を図ることが狙いだが、この度もドイツ・フンデガー社製のプレカット加工機（次ページの写真）を導入し、6月から稼働を開始した。中国・四国地方で初めての導入となる同加工機は、全自動CNC（コンピュータ数値制御）によって基本的にどんな形状でも加工可能な点を特徴とする。これまで対応できなかった長尺材や大断面材（最大：長さ13m×幅1,250mm×厚さ300mm）の加工、細密な特殊加工を高い精度で行うことができる。

但し、図面作成に使用するのは3次元のフリーデザインCADで、使いこなすには習熟が必要となる。当面は従業員1名と秋山社長自らが、従来機と併用しながら、実地で経験を積み加工精度の向上に努めていく考えだ。

### ◎非住宅分野へ事業領域を拡大

現在、在来工法で建築される木造住宅のプレカット材利用率は約9割に達し、プレカット材の普及は飽和状態にあるとされる。また、少子高齢化や住宅ストック数の増加によって、新築の住宅市場は縮小傾向にある。山口県における持家の住宅着工戸数は、1996年度の8,760戸から2015年度は3,300戸と4割未満の水準に減少。今後も中長期で見ると在来木造住宅の着工戸数は減少トレンドが続き、県内の同業他社や大手企業との受注（価格）競争は一段と厳しさを増すことが予想される。

一方で、2010年に公共建築物等木材利用促進法が施行され、公共施設を中心とする建築分野で木造化が進む。そうした追い風を好機と捉え、前述の通り、同社は様々な特殊加工ができる最新鋭のプレカット加工機を導入。これまでも周南市の道の駅「ソレーネ周南」をはじめとす

る非住宅分野への納入実績はあったが、同加工機によって中・大規模建築物分野への事業領域拡大を加速させ、住宅分野の落ち込みを補う狙いがある。

特に、統廃合の進む学校の校舎等の公共施設や介護施設におけるプレカット需要が拡大すると見込む秋山社長は、「自治体等への営業を強化し、1年後を目処に新しい加工機による出荷を軌道に乗せたい」と意欲をみせる。

### ◎おわりに

同社は最新鋭の加工機の導入に年商の半分近くの資金を投じた。「社運を賭けた」大型投資に踏み切った背景には、新設住宅市場が落ち込む中、「価格競争に埋没しない工場」を実現する強い決意がある。今年8月、政府が閣議決定した「未来への投資を実現する経済対策」でも中小企業支援（経営力強化・生産性向上等）が柱の一つに掲げられているが、地方創生の実現にはまさに中小企業の力が必要不可欠だ。同社のように、前向きな投資で企業価値の向上に挑む中小企業がもっと増えれば、地域の未来を切り開く大きな力となるに違いない。

（安岡 和政）



▲ドイツ・フンデガー社製のプレカット加工機



▲左写真の加工機でプレカットされた木材